

不離ズ骸ノ上ニ苔生テ、多ク年ヲ積タリト見ユ、髑髏ヲ見レバ、口ノ中ニ舌有リ、其舌鮮ニシテ生タル人ノ舌ノ如シ、一叢此レヲ見ルニ奇異也ト思テ、然バ夜ル經ヲ讀奉ツルハ、此ノ骸ニコソ有ケレ、何ナル人ノ此ニシテ死テ、如此ク誦スラムト思フニ、哀ニ貴クテ泣々ク禮拜シテ、此ノ經ノ音ヲ尙聞カムガ爲ニ口日其ノ所ニ留リヌ、

〔奥州後三年記〕下將軍源義家、千任丸をめし出して、先日矢倉の上にていひし事、たゞ今申てんやといふ、千任頭をたれてものいはず、その舌をきるべきよしをいふ、源直といふものあり、寄て手を持って舌を引出さんとす、將軍大きに怒りていはく、虎の口に手をいれんとす、甚だおろかなりとて追立、ことつはものいできて、えびらより金ばしをとり出し、舌をはさまんとするに、千任齒をくひあはせてあかず、かなばしにて齒をつきやぶりて、その舌を引いだして是を斬つ、千任が舌をきりをはりて、まばりかゝめて木の枝につりかけて、足を地につけずして、足の下に武衛が首をおけり、千任なくく、あしをかゝめて是をふまず、まばらくありて、ちから盡て足をさげてつゝに主の首をふみつ、

〔源平盛衰記 十八〕文覺清水狀天神金事

文覺ガ云事、龍神ノ心ニヤ叶ヒケン、沖吹風モ和テ岸打浪モ靜也、其時ニコソ舟中ノ者共ハ安堵シツ、安貴アキナキ安貴、是程ニ龍王ヲ隨ヘ給程ノ上人ヲ、忝モ舌ノ和ナル儘ニ、口ニ任テ訕申ケル事ノ淺増サヨ、イカニ加様ノ貴人ヲバ、奉流ヤラントテコソ悅ケレ、

〔吾妻鏡 二〕養和二年元壽永十一月十二日己卯、武衛寄事於御遊興、渡御義久、鐙摺家、召出牧三郎宗親、被具御共、於彼所召廣綱、被尋仰一昨日勝事、廣綱具言上其次第、仍被召決宗親處、陳謝卷舌、垂面於泥沙、

〔倭訓栞 前編 三十六〕よ、む 万葉集に、百とせに老舌出てよ、むと見えたり、老て齒なき人は、舌